

1 事業名 日独学生青年リーダー交流

2 必要性

平成8年の橋本首相とコール首相の日独首脳会談において、次世代を担う日独青年の交流が今後一層拡大されるべきであるとの共通の認識が確認された。平成9年6月のデンバーサミットにおいて、日独両国政府が共同で発表した「日独青少年交流の強化についての共同発表」に基づいて、日本とドイツの青少年団体等でリーダーとして活動する学生・青年等が、文化体験、意見交換、機関や団体で体験活動等を行うことにより、青年リーダーとしての資質を高めるとともに、日独の相互理解と交流の発展を図ることを目的とした「日独学生青年リーダー交流」がスタートすることとなった。

3 趣旨

本事業は、日独両国の青年リーダーが国際性豊かで社会に対し積極的に参画していくリーダーとなることを目的として実施する。

ドイツと日本とは青年の社会参画についての考え方や制度等に相違点があるが、より多くの青年たちが社会に参画していくことは両国共通の課題である。平成23年度は、都会と地方で同世代の青年リーダーとの体験活動や意見交換を通じ、青年リーダーとして社会に参画する意義や姿勢について考えを深める事業を実施する。

4 実施

独立行政法人 国立青少年教育振興機構
国立三瓶青少年交流の家（三瓶プログラム）

5 期日

- (1) 全体受入期間：平成23年8月25日（木）～平成23年9月7日（水）（14日間）
- (2) 地方施設受入期間：平成23年9月1日（木）～平成23年9月6日（火）（6日間）

6 参加者（ドイツ団）

(1) 募集対象・人数

ドイツ連邦共和国に在住し、青少年団体等においてリーダーとしてボランティア活動や社会貢献活動を行っている者で、ドイツ政府・ドイツ側実施機関であるベルリン日独センターにより選出された者。人数は、団員（職業訓練学校生や社会人を含む18歳～26歳のドイツ人学生青年リーダー）15～16名、団長1～2名、計17名

(2) 参加人数

団員8名、団長1名、計9名

(3) 随行者

独立行政法人国立青少年教育振興機構 国際・研修支援課担当職員1名（藤井 玄 国際事業係長）
通訳1名（大澤詩織 NHK 出版）

7 講師等

(1) 講師

- 森 茂晃 (財団法人ホシザキグリーン財団 事業課課長)
- 豊田 暁 (財団法人ホシザキグリーン財団 観察指導員)
- 大野 典子 (国立三瓶青少年交流の家研修指導員 茶道指導)
- 山田 恵子 (国立三瓶青少年交流の家研修指導員 茶道指導)
- 鷲谷 良子 (国立三瓶青少年交流の家研修指導員 着付指導)
- 林 宏子 (国立三瓶青少年交流の家研修指導員 着付指導)

(2) 通訳

- 大藪 正彦 (島根大学外国語教育センター 准教授)
- Roland SCHULZ (島根大学外国語教育センター 特別委託講師)

(3) 独立行政法人国立青少年教育振興機構法人ボランティア (以下法人ボランティアとする)

- 島根大学生 14名, 島根県立大学生 4名, 計 18名
- 学校法人永島学園 出雲西高等学校インターアクトクラブ 15名

(4) 協力

- 江川太鼓同好会 9名
- ホストファミリー 8家族

8 参加経費

実費のみ

9 事業の内容

(1) 事業の特色

平成9年より実施された本事業は、2週間の滞在期間の前半1週間は都市部で行い、後半は地方受入施設で行っている。地方受入施設でのプログラムを、地方施設と機構本部の積極的な連携協力により企画・運営し、国際交流事業のさらなる充実を図る。本事業のテーマは「若者の社会参画」であり、ボランティアとの交流等を通して社会参画について考える。

地方施設のプログラムを企画するに当たり、特徴的な研修支援プログラムの体験や、日本文化体験、同世代の青年リーダー（法人ボランティアや社会教育実習生等）との交流を組み入れるようにする。

(2) プログラムデザインと企画のポイント

今回の国立三瓶青少年交流の家で実施するプログラム（以下三瓶プログラムとする）を考えるために、平成21年度・22年度と「日独学生青年リーダー交流」を行った国立阿蘇青少年交流の家での担当者である中村泰司企画指導専門職を招き、企画・運営のポイントの説明を受けるとともに、三瓶プログラム案に対する助言を得た。

また、国立青少年教育振興機構 藤井玄国際・研修支援課国際事業係長の現地視察に合わせ、三瓶プログラム案への助言及び予算など事務的な打合せを行った。

そして、これらの助言等を踏まえ、三瓶プログラムは下記のような当施設の特色を生かしたものにした。



プログラムデザイン①「法人ボランティアとの交流」

三瓶プログラムの前半は、当施設で活躍する法人ボランティアとドイツ団との交流が図れるよう企画した。これは、ドイツ団は18～26歳の青年で構成されており、本国で政党などの青少年組織の青年リーダーとしてボランティア活動を活発に行っているため、同世代の日本のボランティア活動をしている大学生と交流することは自分の今や将来について考える良い機会であると考えたからである。そのため、ドイツ団と法人ボランティアとの意見交換の場を設定し、互いの活動の相違点やボランティアについて考える場が作れるように企画した。



プログラムデザイン②「三瓶看板活動プログラム 登山」

三瓶山登山は当施設の看板活動プログラムであり、多くの研修団体が自然とのふれあいや達成感を求めて研修に取り入れている。本事業でも、女三瓶登山をすることによって登頂することの達成感を味わうとともに、女三瓶山頂から出雲方向を望み、後半の宍道湖周辺での三瓶プログラムにつなげようと考えた。

プログラムデザイン③「環境保全に取り組むボランティアとの交流」

三瓶プログラム前半では主に青少年に対するボランティア活動をしている学生との交流を企画したので、後半はボランティアのタイプを変え、環境保全に取り組むボランティアとの交流を考えた。そのため、宍道湖の環境美化や河川の浄化に取り組み、中央大学主催第10回高校生地球環境論文コンクール最優秀賞を受賞するなど実績のある出雲西高等学校のインターアクトクラブとの交流により、環境美化に取り組むボランティア活動について理解を深められるようにした。

なお、ボランティア活動の舞台となる宍道湖についての理解を深めるため、宍道湖の野生動物の保護繁殖に関する事業をしているホシザキグリーン財団職員に宍道湖の環境についてのレクチャーを依頼した。

プログラムデザイン④「日本文化体験」

ドイツ団には、異文化体験も研修のひとつにと、日本文化にふれる体験を取り入れた。歓迎夕食会ではドイツをはじめフランス、イギリス、韓国と海外公演を行っている江川太鼓同好会を招き、和太鼓の迫力ある演奏にふれるよう企画した。また、茶道体験、浴衣の着付け体験、古民家体験も企画し、さまざまな日本文化にふれることができるようにした。

プログラムデザイン⑤「ゆとりのあるプログラム構成」

プログラムを組むにあたり、1日の企画数は1～2つに絞り、ドイツ団がミーティングや休憩するのに必要な時間を十分取れるよう配慮した。

(3) 広報のポイント

本事業の主要なプログラムにホームステイがある。ホストファミリーの確保は極めて重要との認識から、その募集を本事業の実施が正式に確定する以前の年度初め早々の4月下旬から開始した。

広報先は、在日外国人と日本との橋渡しをしておられる日本語サークルこだま、交換留学生の受け入れの実績がある大田ロータリークラブ・大田ライオンズクラブ・大田青年会議所に募集チラシを配布して、参加の呼びかけを依頼した。また、ドイツ団と同世代の高校生にも関心を持ってもらうため、大田市近辺の高等学校（大田高校、邇摩高校、江津高校、出雲高校など）

に募集チラシの教室掲示を依頼し、生徒に呼びかけてもらった。そして、江川太鼓の海外公演でドイツと交流の実績がある川本町役場、日韓交流をしておられる大田市役所、国際交流の盛んな美郷町国際交流協会にもチラシを置き、参加の呼びかけを依頼した。

そのほかでは、国立三瓶青少年交流の家ホームページにもホストファミリー募集のチラシを掲載し、広く知ってもらえる機会をつくった。

(4) 日程表

	6:30	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00	
9/1(木)	広島から移動								大田市表敬訪問	交流の到着	施設案内事業紹介	自由行動	歓迎夕食会	入浴	ドイツ団ミーティング	就寝(三瓶)			
9/2(金)	起床	朝のついで清掃	朝食	女三瓶登山 雨天時:ニュースポーツ			昼食	法人ボランティアとの意見交換		ドイツ団ミーティング	ホストファミリー対面式	ホームステイプログラム							
9/3(土)	ホームステイプログラム																		
9/4(日)	ホームステイプログラム								ホストファミリー交流会		自由行動	夕べのついで夕食	自由行動			就寝(三瓶)			
9/5(月)	起床	朝食 身辺整理	退所 点検	ドイツ団ミーティング			昼食	移動	宍道湖の環境についての学習	環境保全に取り組むボランティアとの意見交換	移動	夕食	ドイツ団ミーティング	宿泊(出雲)					
9/6(火)	起床	朝食 チェックアウト		評価会 準備	評価会	移動	昼食	出雲大社参拝	大阪へ移動										

(5) 運営のポイント

運営のポイント①「事前研修の実施」

平成23年度事業としてドイツ団を迎えるにあたり、事前に国立阿蘇青少年交流の家の中村企画指導専門職と機構本部の藤井係長より運営についてレクチャーを受けた。このことにより、事業担当の国立三瓶青少年交流の家職員間で共通認識を持つことができた。また、三瓶プログラムを実施しているときは、藤井係長と連絡を密にし相談しながら進めることができたので、円滑に運営できた。

運営のポイント②「小グループの編成」

三瓶プログラム前半の「法人ボランティアとの交流」は、ドイツ青年1名に法人ボランティア2名で1つのグループとし、そのグループの法人ボランティアが施設の使い方を説明したり、施設内を案内したりして共に行動するようにした。同世代の人とともに三瓶プログラム最初の2日間を過ごせたことは、ドイツ団にとっても心強かったのではないかと思う。

運営のポイント③「安心安全のための情報提供」

ドイツ団は東日本大震災と福島原発に対して関心が高いことが予想されたため、①当施設と福島原発との直線距離 ②当施設と島根原発との直線距離 ③当施設と同緯度の世界の国々の地図を作成し、入所時に説明した後掲示して、いつでも確認できる環境をつくった。

また、細かな日程等はパネルにして大きく拡大し、視覚に訴えた。活動中、台風12号が四国に上陸し、鳥取県米子市付近より日本海へぬける進路であったため、天気図等を使い現状をその都度説明した。

運営のポイント④「ドイツ団の希望を取り入れた活動」

台風による雨天プログラムは体育館でニュースポーツを2つ計画していたが(キンボールとカラーリング)、ドイツ団の要



望もあり、カラーリングをやめてミニサッカー、バレー、カプラ、折り紙に変更し、各自好きなものを選択して行えるようにした。急きよの変更であったが柔軟に対応することによって、ドイツ団にとってはリフレッシュとなる充実した時間を過ごすことができた。

(6) 安全管理のポイント

ドイツ団には事前に施設の使い方や生活についてドイツ語に翻訳したものを研修ノートに入れて情報提供し、安心して研修に参加できるよう配慮した。

また、登山プログラムは危険が伴う場合があるので、実施日の3日前に事前登山し、安全性や注意点を確認した。

なお、三瓶プログラムを実施するにあたっては、ドイツ団が長い研修で疲れていることを考慮し、同行スタッフと体調面等について相談しながら無理なく実施できるようにした。

(7) アンケートの満足度・おもな記述

本事業では最終日に評価会があった。その会の中で三瓶プログラムについてドイツ団より発言されたことを記載する。

- ・ホームステイやニュースポーツなど、いろいろな体験をさせてもらった。
- ・宿泊など事前によく準備されていた。
- ・受け入れ態勢もよかった。質問にもきちんと答えてくれた。
- ・ホストファミリーとの思い出がとても多い。
- ・台風による雨の影響で登山はなくなったが、スポーツで体を動かすことができたことはよかった。
- ・地図を使った説明や台風情報を聞いて良かった。
- ・どこに行っても、とても心温かく迎えてくれた。
- ・全体プログラムのリストアップの資料があったほうがよかった。
- ・三瓶は休暇で行くような自然環境豊かなところと感じた。このようなところでボランティア活動ができるのはうらやましいと感じた。
- ・ボランティアとの意見交換では、1つのポイントから段階を経て話を積み上げていけばよかった。今回の訪日で話せなかったことがらは、逆に日本の学生がドイツを訪問した際の交流会の時に話し合いたい。
- ・ボランティアとの意見交換の時間が短い。また、統一テーマがなかったので、話の内容が分散し、深めることができなかつたのは残念だった。

10 成果と今後の課題

<成果>

成果①「つながり」

ドイツ団は、様々な研修を通して日本の学生やホストファミリーなどいろいろな人とのつながりをつくることができた。特にホストファミリーとは深いつながりができ、交流会で「もう一人娘ができました」と発言されたり、今後のメールのやり取りを約束したりしたファミリーがあった。また、あるホストファミリー宅のおばあさんは、「国が違っても同じ人間だった」と言っておられたように、国が違っても同じ人間としていろいろな年代の人とつながりができた。



このつながりができたことこそ、本事業のねらいの一つである「若者の社会参画」への第一歩となった。

成果②「ボランティア・社会参画に対する意識の変化」

日本の学生やドイツ団は、日独双方のボランティア活動について紹介し意見交換をすることで、日独のボランティア活動の相違点を知るとともに、社会参画に対する考え方の違いを感じることができた。特に、ボランティア活動を通して社会を変えていこうとするドイツ団の社会参画に対する積極的な考えや取り組みは、日本の学生にとっては今までふれたことのない新鮮なものであり、ボランティアに対する自分の認識を変えた学生が多くいた。ドイツ団の社会参画に対する考えにふれることで、今の自分について考えるとともに、これからすすんで社会参画に取り組もうという心構えが育ったことは成果である。

成果③「国際化への広がり」

ボランティア交流をした高校生やホストファミリーの中高校生が「自分もぜひ海外に行きたい」という気持ちになった。また、法人ボランティアとドイツの青年はメールアドレスの交換をして、今後の交流の約束をしている者が多くいた。今回の事業の期間だけで交流が終わるのではなく、今後も学生同士の交流が続いていくことが大いに期待できる。

<課題>

課題①「自己紹介カードの作成」

ドイツ団は自分の所属やメールアドレスなどを記載した団員の紹介名刺を作成していた。この名刺はドイツ青年たちを理解するのに大変役に立ったので、日本のボランティアも同様なものを作っておけば、ドイツ団との交流がよりスムーズにできたのではないかと感じた。

課題②「ボランティアとの意見交換の仕方の工夫」

ボランティア同士の意見交換について、ドイツ団からの感想の中に、「ボランティアとの意見交換の時間が短かった」「意見交換の中にいろいろな話が出てきて、テーマが統一できず、深まらなかった」という意見があった。これらを改善していくためには、①ボランティアの意見交換において何をテーマに話し合いたいかを事前に日独双方から聞く ②その中からテーマを1つから2つに絞ることが必要ではないかと感じた。また、話し合いを有意義に行うために、ドイツ団と交流する日本のボランティアには事前研修を行い、ドイツのボランティア事情を共通理解したり、ディスカッションのやり方などについてもレクチャーしたりすることも必要であろう。

課題③「プログラム内容に応じた法人ボランティアの募集」

今回、三瓶プログラム前半でドイツ団と交流をする法人ボランティアは、島根県内の2つの大学に公募し参加を募った。そのため、参加者の中には法人ボランティアに登録したばかりで、当施設でのボランティア活動の経験がほとんどない学生も参加していた。その学生たちは、ドイツ団と一緒に行動したり、ニュースポーツ等で交流をしたりする場面ではしっかり活動できていたが、ドイツ団とのボランティア活動に関する意見交換の場面では、当施設でのボランティア活動の経験不足のため自分の意見が持てず、苦慮している姿が見られた。誰もが満足いく活動ができるように、プログラムの内容に応じて参加する学生（法人ボランティア）を募集することも必要であると感じた。

1 1 普及計画・普及実績

本事業に関連する記事（大田市長表敬訪問やホストファミリー交流会等）が毎日新聞、朝日新聞、山陰中央新報、島根日日新聞に掲載され、事業を広く島根県民に広報することができた。

成果については当施設ホームページで紹介する。また、事業報告書を作成し、青少年教育施設、青少年教育関係機関等に送付し成果の普及を図る。

1 2 その他

当施設としては久しぶりの国際交流事業であったため、三瓶プログラム作りやホストファミリー募集など初めてのことが沢山ある事業であった。しかし、その分様々な人に助けられて運営することができた事業であったように思う。

また、本事業の中では日本文化体験として茶道と浴衣の着付けを取り入れた。講師の指導によりドイツ団はとても喜んでいましたが、当施設の職員にそれらの指導ができるものは少ない状態であった。日本文化を紹介するためには日本文化について学ばなければならない。今後は、研修等を通して職員も指導できるよう、研鑽に努めていきたい。

本事業を終えて、大学生や高校生の中には今後も引き続き交流をしたいという希望と、自分も海外に行ってみ聞を広めたいという希望を持っている学生が多くいた。国立青少年教育振興機構の事業等を紹介しながら、この交流がこれからも広くつながっていくことを期待したい。

（竹下修二）